SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.58
2023.02

BLUE FLAG Japanサミット2022 実施報告書

一般社団法人日本ブルーフラッグ協会
NPO法人湘南ビジョン研究所
文教大学湘南総合研究所

実施概要

名　　称	第4回 BLUE FLAG Japan サミット 2022 ～海を守り、未来をつくる～
開催日時	2022年12月3日(土) 8時30分～11時30分
開催場所	オンライン形式（Zoomを使用）
目　　的	国内7地域のブルーフラッグ認証海岸・マリーナの関係者が一堂に会し、認証取得の意義を再確認し、ブルーフラッグビーチの現状と課題を共有するとともに、国内におけるブルーフラッグ認証地域の普及による海辺からのSDGsの実現に貢献する。また、ブルーフラッグの取得推進に尽力し、日本の海岸環境の保全及び発展に貢献し、優れた功績を挙げた個人・団体を表彰する「第1回 日本ブルーフラッグ協会賞（主催：一般社団法人日本ブルーフラッグ協会）」の授与式を行う。
実施内容	開会 / 主催者挨拶 第1部　基調講演 第2部　活動紹介 ① 小田の浜海水浴場 ② サンオーレそでは海水浴場 ③ 菖蒲田海水浴場 第3部　研究報告 第4部　優良事例表彰 第5部　ブルーフラッグ取得を検討される方向け説明会 閉会
主　　催	一般社団法人日本ブルーフラッグ協会
共　　催	NPO法人湘南ビジョン研究所
後　　援	文教大学湘南総合研究所
参 加 者	約50人

開会／主催者挨拶

一般社団法人日本ブルーフラッグ協会
代表理事　片山清宏

《Profile》片山清宏 Kiyohiro Katayama
藤沢生まれ。厚木市役所、イギリス・スウェーデン海外研修派遣、神奈川県庁を経て松下政経塾に入塾。2011年NPO法人湘南ビジョン研究を設立、理事長に就任。海の環境問題に取り組む。2020年「かながわ地球環境賞」受賞。慶應義塾大学SFC研究所上席所員

みなさん、おはようございます。本日は、北は宮城県から南は奄美大島まで、日本全国から多数の方にご参加いただき、ありがとうございます。

本サミットは、国内7地域のブルーフラッグ認証海岸・マリーナの関係者が一堂に会し、認証取得の意義を再確認し、ブルーフラッグビーチの現状と課題を共有することで、ブルーフラッグ認証地域の普及と、海辺からのSDGsの実現に貢献することを目的としています。

ブルーフラッグとは、国際NGO FEE（国際環境教育基金）が実施するビーチ・マリーナ・観光用ボートを対象とした世界で最も歴史ある国際環境認証制度です。ビーチでは4分野33項目の認証基準を達成すると取得でき、毎年の審査を通じてビーチ等における持続可能な発展を目指しています。

ブルーフラッグは1985年にフランスで誕生。特にヨーロッパでの認知度は高く、ブルーフラッグビーチは「きれいで、安全安心、で誰もが楽しめる優しいビーチ」として、多くの人々がバカンスに訪れています。2022年11月現在、世界50ヶ国、5,066ヶ所が取得。ブルーフラッグ認証プログラムは、SDGsの17ゴールにすべて関連しており、FEEでは、UNEP（国連環境計画）、UNWTO（国連世界観光機関）等との連携のもと、世界各国においてこのプログラムを推進しています。

2022年4月に逗子市「逗子海水浴場」と「リビエラ逗子マリーナ」が新たにブルーフラッグを取得し、国内では6カ所のブルーフラッグのビーチと1カ所のマリーナが誕生しました。マリーナでの取得はアジア初です。

2023年度に向けては、宮城県気仙沼市「小田の浜海水浴場」、南三陸町「サンオーレそではま海水浴場」、七ヶ浜「菖蒲田海水浴場」、千葉県勝浦市「興津海水浴場」の4カ所が申請中です。審査を無事に通過すれば来年5月には、この4つのビーチが東北初として、ブルーフラッグを取得される予定です。

2022年4月1日に、国内のブルーフラッグ認証機関がFEE JapanからJARTAに変更されました。これに伴い、2022年度以降、ブルーフラッグ取得を希望するビーチ・マリーナ・観光用ボートは、JARTAに審査を申請することになります。また、同日付で、ブルーフラッグの取得支援を専門とする日本ブルーフラッグ協会が設立されたことにより、国内のブルーフラッグ推進体制は、認証業務を担うJARTAと、取得支援業務を担う日本ブルーフラッグ協会の両組織の連携体制が整備されました。

本日は、皆さんと多くの闊達な意見交換をさせていただければと存じます。どうぞよろしくお願いします。

第1部 基調講演

「森里海の持続可能なまちづくりをデザインする　～いのちめぐるまちを目指して～」

一般社団法人サスティナビリティセンター 代表理事　太齋彰浩氏

《Profile》太齋彰浩 Akihiro Dazai
南三陸町在住。民間研究機関で海洋生物・生態学研究に従事後、南三陸町へ移住。東日本大震災後、行政職員として水産業復興の計画づくりに奔走。地域資源プラットフォーム構想を実現するため役場を退職し、2018年一般社団法人サスティナビリティセンターを設立。

■地域密着型の教育を求め移住

私は、民間企業で6年ほどキャリアを積んだ後、地域密着型の教育がしたくて南三陸に移住しました。当初は南三陸町役場の職員として活動し、その後起業して今に至ります。また、南三陸の海で20年以上潜って（ダイビング）海の調査もしています。

■森里海ひと　いのちめぐるまち　南三陸

今、南三陸が将来像として掲げているのが、「森里海ひと　いのちめぐるまち　南三陸」で、私たちの団体もいのちめぐるまちの実現とその理念の普及を目的に設立しました。まちの特性を活かすためには、その土地の自然環境をしっかりと把握することが重要です。南三陸町は三陸リアス海岸の一番南にあり、海流の影響を受けています。特に南から来る暖かくて栄養の少ない海流である黒潮、北から来る親潮、そして、津軽海峡から下りてくる津軽暖流の三つの海流が混ざり合った環境というのがこの湾の特徴です。まちの地形は、志津川湾を取り囲むように形成されており、町境が分水嶺で囲まれているのが特徴です。

生き物については、主に寒流の影響により、寒い海の生き物がよく見られます。アサヒアナハゼやクチバシカジカ、冬にはクサウオ、トゲクリガニなどが産卵のためにやってきたりもします。メンコガニやミズダコも生息しています。植物はマコンブが生息しています。

一方で、暖流の影響も受けているため、暖かい海の生き物も見られます。例えば、マダコ。マダコとミズダコの両方が獲れるということで、タコの名産地として知られるようになりました。ミナミハコフグやソラスズメダイなどが夏から秋にかけてやっていますが、大概は冬を越せずに死んでしまいます。暖かい海の代表的な植物として、アラメという海藻があります。他にも、海藻だけでなく海草（うみくさ）という海の中で草原を作るような植物も生息しています。志津川湾では海草が5種見つかっており、これを餌にコクガンという天然記念物になっている渡り鳥がやってきます。海藻が豊富であったり、コクガンが来るということで、ラムサール条約の登録湿地にもなっています。

人間の活動も盛んで、養殖や漁船漁業が行われています。代表的なものは牡蠣養殖です。特に震災後、一度牡蠣の養殖は壊滅しましたが、漁業者の努力により牡蠣養殖を復活させ、今ではとても良い状態で養殖ができるようになりました。その他、ホヤやワカメの養殖もとても盛んです。

■志津川湾でブルーフラッグを目指す

志津川湾というのは、人間活動と自然環境が共存している海ですが、ブルーフラッグの認証申請を契機に、最近では

ビーチクリーン活動なども行っています。その際、ひとくくりにゴミといっても色々な種類があり、自然の循環に乗っているものとそうでないものがあることが実感できます。例えば、アマモや海藻などが海岸に打ちあがったものは、実は小さな生き物の非常に良い餌になり、小さな甲殻類がこれを分解してくれます。それがまた志津川湾の魚の餌になっていきます。ゴミをひとくくりにして扱うのではなく、自然の循環に乗っているものはしっかりと残しておくことで、循環のパイプを太くすることができると考えています。現在、ゴミの適切な処分方法を考えています。

■持続可能な山づくりが海の環境改善に

南三陸は海だけではなく、山も特徴的で、町内の約8割の面積が山に囲まれています。いのちめぐるまちを考えた際に、陸域の活動が重要なので、循環のパイプを太くするため、震災後にまちではバイオマス産業都市構想というのを立ち上げました。官民一体となり、この取り組みを進めることで、いのちめぐるまちの実現を目指しています。日本の山は植林された杉山が多いですが、木の価格が下落したため、ほとんど手入れがされておりません。本来森が持つ機能が損なわれており、放置された森林では、河川の流量低下・不安定化、大雨での土壌流出や山が崩れて鉄砲水になるなど災害の危険も増しています。山にもしっかり手を入れないと海にもいい影響が出ないと考えています。震災後に、林業者が山の生態系にも配慮しつつ、労働環境も守りながら持続可能な山づくりをするという理念のもと、FSC®という森林認証取得に取り組み、県内初のFSC®認証を取得しました。

この取組みは、実は養殖にも影響があります。カキやホヤの餌は植物プランクトンですが、それにも色々な種類がおり、主にケイソウグループとウズベンモウソウグループに大きく分かれています。どちらも餌であることに違いはないですが、ウズベンモウソウグループの中には貝毒の原因になるものがいます。ゆえに、できればウズベンモウソウではなくケイソウが増えてくれた方が漁業者にとっては都合が良いのです。ケイソウというのは殻がガラス質でできており、そのガラス質を作る原料が山から流れて来るケイ素です。川の水が安定的に流れないとケイソウが増えづらい環境になり、貝毒を持つウズベンモウソウが増えてしまうとカキ等が出荷できない日が増えてしまいます。このことからも、山の手入れが重要といえ、取り組みが進められています。

また、イネ科の植物は体を頑丈にするためにケイ素を吸収して、プラントオパールというものを作ります。植物が吸収したプラントオパールからはケイ素が溶け出しやすく、川を経由して海に流れるため、遊休農地が増えているなかで、稲作を続けるということも海にとっては重要なのではないかと考えています。

■バイオマス都市構想

これまでの日本では、家庭で出る生ごみは燃えるゴミとして焼却して埋め立てされるのが普通だと思います。ですが、生ごみの重量の8割が実は水なのです。我々は生ごみを処理するためにわざわざ化石燃料を使って水分の多いゴミを燃やしています。これを何とかして解決したいと考えたのがバイオマス都市構想です。南三陸では、各家庭で生ごみだけを分別して集め、それをバイオガス施設に入れてメタン発酵させることで液体肥料を作り、田んぼや畑に供給するという取組みを行っています。さらに、この時に発生したメタンガスを使って、発電も行っています。液肥を散布する特殊な車両を町内の運送会社が購入し、液肥を散布してくれることで、農家もとても助かっています。こういった取り組みをいろいろな学校や企業が見学に来ています。

■海水温の上昇で、サケが減少

漁船漁業も盛んで、南三陸ではシロザケの水揚げがとても多く、シロザケからとれるイクラはキラキラ丼として町内の飲食店で様々に工夫されて提供されてきました。これまでは獲れていたんです。まちで震災後に孵化放流施設を復活させ、人口採苗をして放流したサケがまた戻ってくるはずでした。ですが宮城県のサケの来遊数は近年どんどん減少しています。2022年はほとんど戻ってきておらず、記録的な不漁が新聞等をにぎわせています。南三陸は寒流主体の海ですが、実はイセエビが獲れるようになってきています。イセエビといえば、通常房総半島よりも南でしか獲れなかったものが、今や三陸で水揚げされるようになっています。また、ここ数年太刀魚がブームになっていまして、指5,6本分の太刀魚が釣れるようになっています。10年前の房総半島で見られたような光景が、今の南三陸の海になっており、その原因は海水温度の上昇です。海水温が上がったことが、サケが戻ってこない原因になっているとも考えています。志津川湾の冬の最低水温は5℃くらいでしたが、最近では、7℃くらいまでしか下がらなくなっています。これが南の魚が生き残る原因になっていると思われ、水温上昇の原因は、やはり二酸化炭素の上昇にあると言われています。二酸化炭素の上昇はまた、海洋の酸性化を引き起こします。私たちが出した二酸化炭素が海に溶け込むことで、海水のpHが中性に近

づいてしまいます。これはとても恐ろしいことで、カキの幼生の時期に酸性化が起きてしまうと、殻がうまく作れずにカキが死んでしまいます。

■二酸化炭素を出さない暮らしで海洋の酸性化を防ぐ

このままいくと、今世紀末までのどこかで海洋の酸性化が問題になるだろうと言われています。二酸化炭素の上昇というのは他ということです。人ごとではなく、持続可能なまちを作るということを考えたとき、とても重要な話だと思います。温暖化を食い止めるだけではなく、海洋酸性化も食い止めることがまちの持続可能性を上げることに繋がりますので、やはりこのことはどこに行っても重要なのではないかと思います。できることは、二酸化炭素を出さない暮らしにシフトすること。それをまちとしても進めていく必要があるということです。環境教育という部分で南三陸を訪れる方々に伝えていきたいなと考えています。

■サイエンスに基づいた“いのちめぐる”まちづくり

循環型のまちというものを考えたときに、重要なのはサイエンスに基づいた打ち手を考えるということです。“いのちめぐる”と言っても何がどのようにめぐっているのかを具体的にとらえることが重要です。そういったことに様々な研究者とともに取り組んでいます。その取り組みのひとつとして、『南三陸いのちめぐるまち学会』を立ち上げて、研究者あるいは住民や企業の方に来ていただいて、共通の認識を持つ場をつくるといったことを行っております。南三陸ではブルーフラッグ認証も梃子（てこ）にしながら町全体で循環型のいのちめぐるまちづくりに取り組んでいます。

第２部　活動紹介

「ブルーフラッグ取得に向けた新たな取り組み」

①小田の浜海水浴場
一般社団法人気仙沼市観光協会
誘致推進統括官 千葉光氏

■ブルーフラッグ認知度向上の取組みを展開

気仙沼市ではブルーフラッグの取得に向けて、ブルーフラッグの認知度やブランディングの効果、環境教育などに関する理解度を向上させるため、住民や事業者への説明会に重点を置いて、実施回数も予定より多く行う予定です。

バリアフリー対策や安全リスクの課題を克服するために、地元業者と対応策について協議しました。ブルーツーリズムの事業（※）と連動して、小田の浜や周辺の浜を利用しての環境教育や、マリンアクティビティの講習会、体験会などを実施しました。

■気仙沼の海の魅力を伝えるために

気仙沼の海の魅力を伝えるために、ツーリズムEXPOに出展しました。観光・旅行業の方や海外の観光局、一般来場者に対して気仙沼の深堀した海の魅力について詳しく説明しました。海の体験コンテンツも新たなものを追加して、海の魅力を知ってもらいながら、この景観維持に繋げていくためにもブルーフラッグは必要だと考えております。

（※）ブルーツーリズム推進支援事業　地域における、海水浴場等の受入環境整備、海の魅力を体験できるコンテンツの充実、海にフォーカスしたプロモーションの強化、ブルーフラッグ認証（ビーチ・マリーナ・観光船舶を対象とした環境認証）の取得に向けた取組を支援する観光庁の補助事業。海の魅力を発信するブルーツーリズムの推進を目的とする①海水浴場等の受入環境整備、②コンテンツの開発、③プロモーションの実施、④ブルーフラッグ認証取得に向けた取組　の４つの取組に対し、事業費の8/10の補助が受けられる。対象は岩手県、宮城県、福島県及び茨城県における市町村、観光協会、登録DMO。（観光庁HPより抜粋）

②サンオーレそではま海水浴場
南三陸町商工観光課
観光振興係長　阿部大輔氏

■震災から復興した海水浴場

南三陸町サンオーレそではま海水浴場は、東日本大震災で被災し、その後、平成29年に災害復旧工事を終え再開することができました。この海水浴場は、町が開設し、運営を南三陸町観光協会に委託しており、受託者との間で、どのような海水浴場にしていくか、毎年度話し合いを重ねております。

■BFを目指したきっかけ

ブルーフラッグ認証の取得を目指すきっかけとなったのは、平成29年の海水浴シーズン終了後の運営団体との振り返りの話し合いの中で、「内湾の奥にあり波も静かで、駐車場からのアクセスも良いことから、できればユニバーサルビーチとして、障がいのある方も子供達も皆が楽しめる場を作りたい」という意見がありました。その際、観光協会の担当者からブルーフラッグ認証という仕組みがあるという話をうけ、これまでも震災後の環境に配慮したまちづくりを進めていた南三陸町としては、森の環境認証FSC、海の環境認証ASC、そして志津川湾がラムサール条約登録湿地となったというところで、観光面でも改めて環境を意識した取組みを推進するため、観光庁のブルーツーリズム推進補助金の募集を機に令和４年度からブルーフラッグ認証に向けた取組みを始めました。

■ビーチを活用した環境学習

ブルーフラッグ認証を取得するうえでは、ビーチを活用した環境学習に取り組む必要があることから、ビーチクリーンと環境学習を組み合わせた取組みを実施しました。その活動では、本日も講演いただいたサスティナビリティセンターの太齋氏を講師に招き、漂流ゴミから海藻とプラスティックなどのゴミを分別し、海の生態系やゴミが環境に与える影響などを学ぶことができ、参加者からも「ビーチクリーンってゴミ拾いだよね」と思って参加した方が、ゴミ拾いから海の環境のことを学ぶ機会になって非常に良かったという声を多数いただきました。地域のフィールドと、そこで環境教育面で活動されている方がいるというのは、南三陸町の強みだと思っており、取り組みを進めていきたいと思っております。

■安全リスク調査で見えてきたビーチの課題

一方、海水浴場のトイレなど付帯施設のハード面では、災害復旧の際にバリアフリー化が図られていたのですが、今回の安全リスク調査で見えてきたのは、砂浜へアクセスするスロープの傾斜が急すぎたということです。元々スロープは設置されていたのですが、実際に車イスにのった障がい者とその家族に利用してもらったところ、一人では坂を登れず、介助者がいても砂で斜面が滑るため危険だということが判りました。

また、障がい者用以外のトイレでも２０センチの段差があり、子供やお年寄りが躓（つまづ）きやすいなどの問題も判明しました。今年度の改修工事でスロープを従来通りの設計で追加設置する予定でしたが、現在直しを図っているほか、来年度に向けて改修しなければならない箇所の洗い出しを行っております。

■BF認証を目指すことがビーチの安全につながる

何気なく普段見ている海水浴場なので、いろいろな方々の目でチェックしていただくことで、危険箇所など私たちが気付かないところが分かることができています。取得に向けた取組みを推進する過程でビーチの安全が図られるようになったのではないか、今後の運営面の改善も含めて、ブルーフラッグ認証は非常に期待をしております。

現在は、ビーチの活用や環境教育の充実に向けて町内の

関係団体と来年度に向けて、運営体制も含めた話し合いをもっております。元々環境意識が高い町でもあるので、この取組みを海水浴場利用者に限らず、海水浴場を通じて南三陸町の魅力を伝えていくためにはどういったことが必要かというところで、非常に短い海水浴場期間の前後も含めて、漁業体験などのブルーツーリズム、グリーンツーリズムなどを森里海のつながりの中で活動の場を広げるためにいろいろな知恵出し、アイデア出しをしているところです。

■BF認証取得をゴールにしない、具体的な活動を

今後の課題ですが、ブルーフラッグを取得したというところで終わってしまわないで、常にビーチを活用しながらどうやったら環境意識とか、いのちめぐるまち町ということを皆さまに伝えていけるかというところをより具体的な活動につなげていきたいと考えております。

③菖蒲田海水浴場
一般社団法人七ヶ浜町観光協会
副会長　久保田靖朗氏

■東北で最も古い海水浴場

七ヶ浜町は、仙台市からおよそ20km、松島湾のなかの一つの町で、三方が山に囲まれています。菖蒲田浜（しょうぶだはま）は、明治21年に開設された東北で最も古い海水浴場で、古くは外国人避暑地でもあり多くの人で賑わっていました。現在は有名なサーフスポットであり、ロングボードの大会が開かれています。私は、この菖蒲田浜でカフェレストランを経営しています。

■震災イメージを払拭するために

東日本大震災では高さ12mの津波が襲来して、七ヶ浜町は土地の約40%が浸水し、海岸は壊滅的な被害を受けました。震災後、住民が話しあって菖蒲田浜から花渕地区を中心としたまちづくりの計画を策定しました。「海は怖い」といったイメージを払拭するために、海岸での音楽やマリンスポーツ、ダンスのイベントを行ったほか、1,000人ビーチクリーンを企画しました。

ついに2016年に菖蒲田海水浴場をプレオープン、翌17年には正式にオープンとなり、19年の来場者は約8万人に達しました。また、東日本大震災前、海水浴場には、ライフセーバーは不在でしたが、2016年から常駐を依頼し、本年は約30名のスタッフが参加して、このうち6名は有資格者でした（監視長は神奈川県葉山にて監視の経験あり）。このような背景から、この度ブルーフラッグ取得を目指すことになりました。

■「きれい」だけではなく「豊かな」海を目指して

今後力を入れていきたいのは「教育」です。東日本大震災後から、環境教育に「海」を取り入れてきました。菖蒲田浜では、ビーチクリーン、ビーチマネジメント、海浜植物や砂ガニ観察など、環境教育に関する題材を豊富に持っています。長い目で見て、「きれい」だけではなく、海岸を守り、生態系として循環していく豊かな海岸を目指したいです。

■通年で楽しめるブランディングを

東北では、秋冬のオフシーズンでの活動は課題です。私のレストランも夏と冬では客足が約5倍近く違います。このため、日常から海に接する環境をつくることが必要です。ビーチクリーンを定期的に開催し、ゴミ袋やトングを貸し出したり、ゴミの集積場を用意したりすることを検討しています。さらに経済も連動しなければなりません。湘南のようなブランディングはとても参考になります。ちなみに鎌倉市七里ガ浜地域とは、2011年6月以来、「七ヶ浜復興支援隊」（現：七七支援隊）（※）として、定期的に支援・交流活動を行っています。七ヶ浜町は地形的には「出島」のような場所のため、通りすがり訪れる場所ではなく、来る方には目的が必要です。近くには“食”は塩釜があり、“歴史”は多賀城、“景観”は松島があり、差別化は簡単ではありませんが、例えば、複数の飲食店で協力して、ここでしか食べられないようなものを提供するなどを考えていきたいです。

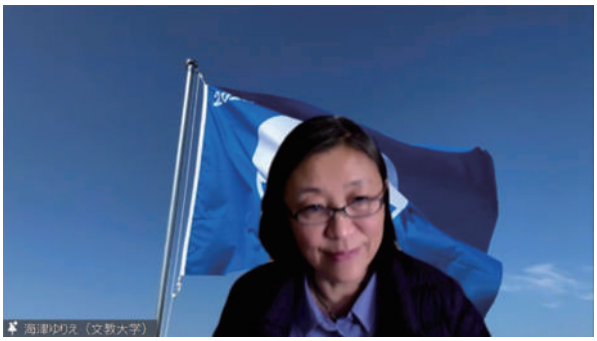
（※）七七支援隊HP　https://77shientai.com/

第3部　研究報告

「海辺における市民参加型環境活動を基盤としたイノベーションに関する研究―国際環境認証ブルーフラッグ取得地域を題材に―」

文教大学国際学部 教授　海津ゆりえ氏

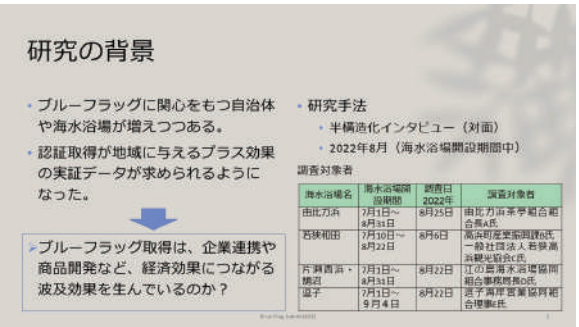
《Profile》海津ゆりえ Yurie Kaizu
鎌倉在住。農学博士。有限会社資源デザイン研究所代表取締役社長、文教大学国際学部准教授等を経て現職。NPO法人日本エコツーリズム協会理事、環境省エコツーリズム推進会議委員、鎌倉市観光協会理事等を歴任。専門：エコツーリズム論。



■はじめに

一般社団法人日本ブルーフラッグ協会代表理事　片山清宏さん、文教大学国際学部教授 菅原周一さんとの研究チームで毎年ブルーフラッグに関する調査研究を行い、サミットで結果速報をお伝えするのも今年で3年目になりました。

すでに認証を取得されたビーチが評判となったり、観光庁が東日本大震災被災エリアの海水浴場での取得を後押ししたりと、ブルーフラッグを取り巻く環境の変化は著しいものがあります。ブルーフラッグの取得に関心を抱く地域が増えるにしたがって、自治体等からブルーフラッグ取得のメリットを尋ねられることも多くなってきました。そこで、今年度は《ブルーフラッグを取得したことによって、各海水浴場や地域にどのような新しい展開が生まれているのか》を調査いたしました。



【質問手法】及び【質問対象者】は下図参照

■質問内容

ブルーフラッグ取得をきっかけに生まれた
- ・活動団体、企業との連携はあるか
- ・開発された商品はあるか
- ・ブルーフラッグ取得のメリットはあるか

■結果

①由比ガ浜海水浴場

由比ガ浜茶亭組合組合長の増田元秀さんにお話しを伺いました。まず、バリフリービーチを実現する過程で、国や県との繋がりができたことが成果であると教えていただきました。また、海の家間を繋ぐように敷いたボードウォークの設置やBEACH SPORTS FESTIVAL in YUIGAHAMA（5月28日）の実施などは海岸法に従い県の許可を必要としますが、その縁があって、昨年5月に神奈川県スポーツ局の事業として「みんなのスロープ」が実現しました。

またCSRの一環としてブルーフラッグ取得ビーチに協賛する企業も現れました。

- ・株式会社カネカ：海中でも二酸化炭素と水に分解される海洋生分解性プラスチック『Green　Planet』製のカトラリーとストローの無償提供。
- ・エーザイ株式会社：抗菌化スプレー『イータック』（一度塗布すると１週間抗菌作用が持続）の無償提供。※片瀬西浜と逗子にも協賛していただくよう提案。
- ・鎌倉ビール醸造株式会社：海の家での販売用として新銘柄『ルート134』の無償提供。

②若狭和田海水浴場

高浜町産業振興課の仲野博之さん、一般社団法人若狭高浜観光協会の高田慎平さんにお話しを伺いました。高浜町ではブルーフラッグを町の政策の基本理念に据えているとのことでした。例えば、近年始まったSDGs教育では、ブルーフラッグを学校教育の教材として扱ったり、視察者対応では最初に海水浴場を案内したりするなど、ブルーフ

ラッグの理念が町に浸透していることがわかりました。

さらに、若狭和田海水浴場を夏季の集客の拠点とし、そこから他へ誘導することで来訪者の回遊性を高め、集客効果を町全体に還元しながら地場産業を活性化しようとしていました。

具体的には水産業の拠点『UMIKARA』（2021年7月オープン）の利用を促しています。この施設は魚や加工品の販売と魚を使った食の提供をしています。また、バリアフリービーチ実現のために敷いた「ウッドロード」を将来は町の木材で作りたいと考えていました。

（出典：若狭高浜観光情報サイト）

漂着ごみ対策として、回収ペットボトルをアップサイクルする活動が4者連携（ブルーフラッグアカデミー・高浜町商工会・NPO法人アノミアーナ・シースターズ）で始まっています。鯖江市のメガネ業者に依頼し、回収したペットボトルから製造したサングラス『オーシャングラス』を販売しています。

③片瀬西浜・鵠沼海水浴場

江の島海水浴場協同組合の金子ふたばさんにお話を伺いました。神奈川県のSDGsパートナーに登録している『江の島海水浴場協同組合』と『江ノ島電鉄株式会社』が連携し、江ノ電の1日乗車券と海の家のシャワー等の1日使い放題券をセットにして発売しました。また以下の企業協賛がありました。

- エーザイ株式会社：抗菌化スプレー『イータック』の無償提供
- 鎌倉ビール醸造株式会社：新銘柄『ルート134』の無償提供

昨年よりプラごみを出さないことを目的とする企業協賛として

- 丸紅株式会社：利用希望の海の家に丸紅開発の循環型食器「edish」の販売（昨年は実験的に無償提供）。

さらに、ブルーフラッグの基準を支える活動団体との連携が深まっています。株式会社メディケアとバリアフリーマットを提供していただいている株式会社櫻井工業から折り畳みスロープ３台の提供がありました。教育機関との繋がりとして、近隣の『湘南白百合学園中学・高等学校』の有志生徒から「ごみのポイ捨て注意アナウンス」が提供されたほか、ビーチクリーンに参加する学校も増えています。

④逗子海水浴場

逗子海岸営業協同組合の勝田康司さんにお話を伺いました。逗子海水浴場は今年認証を受けたばかりの最新のビーチです。以下の企業協賛がありました。

- フィリップモリス・ジャパン：加熱式タバコ専用エリアを設け「煙のいないビーチ」を実現
- エーザイ株式会社：抗菌化スプレー『イータック』の無償提供

（出典：一般社団法人アンドビーチFBページより）

また、日本財団の助成によって、何度も使えるリユースカップを導入し、海の家での使い捨てプラカップの使用を禁止しました。

2022年年7月に開催された「ブルーフラッグ認証取得記念シンポジウム～海を活かした持続可能なまちづくりを目指して～」では、逗子市民と海の繋がりの濃さが伺えました。

特に逗子の特徴は市民が海辺の環境美化に関心を抱いていることだと思います。例えば、海水浴場開設期間は『NPO法人iPledge』の協力を得て「クリーン＆ピースプロジェクト」を立ち上げ、ビーチエコステーションを設けてごみの分別をしました。

さらに画期的なのは、今後のブルーフラッグに関する活動を持続するため『一般社団法人＆beach（アンドビーチ）』を2021年に立ち上げ、組合だけではなく他の団体もメンバーにすることで、企業協賛や環境保全活動を円滑にできるような枠組みを作ったことです。

■考察

以上の調査結果から、次のような共通点と特徴が浮かび上がりました。

- 理念に賛同する企業による協賛や海水浴場運営協力が得られている。
- ブルーフラッグは行政とのコミュニケーションツールとなる。
- ブルーフラッグ取得ビーチは市民や学校へのSDGs教育と実践の場となる。
- ブルーフラッグ取得ビーチはまちづくりにも一役買っている。
- ブルーフラッグ取得ビーチ同士の横の繋がりや支え合いが生まれている。
- ブルーフラッグ取得ビーチがメリットと感じているものは、経済よりも社会関係資本である。

■結論

本研究の主題である「市民参加型環境活動を基盤としたイノベーション」に関して、次のようなことが言えます。ブルーフラッグは企業や活動団体・学校などが、その理念の元に集う目印、すなわち「旗」である。ブルーフラッグがハブとなり、その理念に共鳴する主体から新しい活動を引き出す可能性がある。また一定の時期と空間で開かれる海水浴場は社会実験の場となりやすく、その試みが社会に還元される可能性は大きい。すなわちブルーフラッグはイノベーションの基盤となりうるということです。本研究では経済的な側面までは把握することができませんでした。今後の課題としたいと思います。

■参考文献

- 海津ゆりえ・片山清宏・菅原周一（2021）「市民ネットワークによる海辺のまちのSDGsの実現に向けて―国際環境認証「ブルーフラッグ」に関わるNPO法人湘南ビジョン研究所の活動に焦点を当てて」（『湘南ジャーナル』25号、文教大学湘南総合研究所、91-108）
- 海津ゆりえ・片山清宏・菅原周一（2022）「海辺の環境保全運動と市民ネットワークに関する研究―国際環境認証「ブルーフラッグ」認定地域を題材に」（『湘南ジャーナル』26号、文教大学湘南総合研究所、27-46）
- 国土交通省（2006）「第1回海岸管理のあり方検討委員会資料２　海岸管理の現状について」http://www-w.nilim.go.jp/lab/bcg/siryou/tnn/tnn0619.htm

第4部 優良事例表彰
日本ブルーフラッグ協会賞授与式

■日本ブルーフラッグ協会賞とは

日本ブルーフラッグ協会が年に１回主催する賞で、ブルーフラッグの取得推進に尽力し、日本の海岸環境の保全及び発展に貢献し、優れた功績を遂げられた方々並びに今後の活躍が期待される方々（団体を含む）に贈られます。

第1回日本ブルーフラッグ協会賞受賞団体

由比ガ浜海水浴場

【受賞者】

鎌倉市、由比ガ浜茶亭組合

【受賞理由】

2016年4月にアジアで初めてブルーフラッグを取得され、

持続可能で魅力的な地域づくりを進めてきました。特に由比ガ浜茶亭組合を中心に、行政、企業、関係団体、市民が連携した環境美化活動、環境教育活動、バリアフリービーチ推進の成果は顕著であり、他のブルーフラッグビーチの模範となるものです。

海の家で使う食器を「生分解性プラスチック」に切り替えていく取組や、プラスチック製品を減らす目的で発信した「由比ガ浜ブルーオーシャン宣言」は、他のブルーフラッグビーチや自治体に先駆けた取組で今後の全国への展開が期待されるものです。

鎌倉市は 2016 年の初取得以来 7 年連続でブルーフラッグ認証を更新し続け、国内のブルーフラッグの普及推進に多大なる貢献をし、日本の海の環境保全と持続可能な社会の発展に寄与されています。

【受賞団体からのコメント】
由比ガ浜茶亭組合組合長　増田元秀様

この度は日本ブルーフラッグ協会賞を賜り、誠にありがとうございます。2016年から毎年ブルーフラッグを更新して参りましたが、ここ2年間はコロナの影響で海水浴場が休場、ブルーフラッグは掲げられることもなく、私の鞄の中で眠っておりました。ですので、この度の受賞は7年間、一年も絶やさずにブルーフラッグ活動を継続してきた私たちへのご褒美だ!と喜んでおります。

ご紹介いただきました受賞理由を補足いたします。海の家のまわりのボードウォーク設置のきっかけは、次のパラリンピック・パリ大会から正式競技入りか?との噂がある障がい者サーフイン競技、2018年、19年の世界チャンピオンの内田一音さんが、アメリカでの世界大会から凱旋の際に「日本の海岸が恥ずかしい!障がい者スポーツのインフラが全くない!」と発した帰国第一声です。

本来、海岸のインフラ整備は行政の仕事と認識しておりましたが、まずはブルーフラッグを継続取得している私たちの手で何とかしたいと考え、行動を起こしました。由比ガ浜茶亭組合所属の組合員一人一人がお金と力を出しあって800mのボードウォークを完成させる事となります。結果、車椅子ユーザーはもとより、ご高齢の方やベビーカーのママたちにも大好評です。翌年には私たちの行動が神奈川県を動かします。海沿いの国道から海岸のトイレまでをユニバーサル化した「みんなのスロープ」が完成しました。また、県はこれを契機に、障がい者のマリンスポーツフェスタを継続して開催しています。

一方、(株)カネカさん、年商8000億円近くの大企業です。100%バイオマス由来で、海水中でも生分解される生分解性バイオポリマーGreen Planet®を開発されました。その商品PRのパートナーとして、アジア初のブルーブラッグ・アワードビーチ由比ガ浜海水浴場をご指名いただきました。2022年夏、海の家全店がこの素材から作られた食器でお客様に飲食を提供しました。秋になり、使用した食器は焼却処分される事なく堆肥の原料となり、肥料として地元の農家へ提供されています。新しい環境サイクル構築の為の社会実験(※)です。

これからも全国のブルーブラッグ・アワードビーチと力を合わせ、2030年へ向け、SDGsの達成率を向上させてゆく所存です。一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。
(※)カネカ生分解性バイオポリマー Green Planet®
https://greenplanet.kaneka.co.jp/

2023年1月19日、日本ブルーフラッグ協会代表理事・片山清宏が、松尾鎌倉市長を表敬訪問しました。

若狭和田ビーチ
【受賞者】
高浜町、一般社団法人若狭高浜観光協会

【受賞理由】
2016 年 4 月にアジアで初めてブルーフラッグを取得され、持続可能で魅力的な地域づくりを進めてきました。特に高浜町、ブルーフラッグアカデミー、関係団体及び市民が連携した環境美化活動、環境教育活動、ユニバーサルビーチ、企業と連携したペットボトルリサイクル製品の商品化の取組の成果は顕著であり、他のブルーフラッグビーチの模範となるものです。

高浜町は 2016 年の初取得以来 7 年連続でブルーフラッグ認証を更新し続け、国内のブルーフラッグの普及推進に多大なる貢献をし、日本の海の環境保全と持続可能な社会の発展に寄与されています。

【受賞団体からのコメント】
高浜町産業振興課　仲野博之様
若狭高浜観光協会　高田慎平様

（仲野様）
今回は受賞ありがとうございます。みなさんにご協力いただきながら今後も頑張っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（高田様）
ブルーフラッグ協会賞を受賞いただき、みなさんの模範になれるようにこれからも頑張っていきたいと思います。受賞にあたり、評価をいただいた高浜町の2つの事例をご紹介させていただきたいと思います。

［オーシャンサングラス］
海岸漂着物のペットボトルをリサイクルしたサングラスで、「ブルーフラッグアカデミー」「高浜町商工会」「アノミアーナ」「Seastar（シースター）」という4つの団体が協力して製品化に取り組みました。

ビーチクリーンをしてペットボトルを回収し、洗浄してから鯖江市の「内田プラスチック」さんで、眼鏡フレームに成形いただいております。販売にはまだまだ課題がありますが、このような製品が全国に届くよう継続していきたいと思っています。また、このようにリサイクルをしていただける事業者の方から「ライフジャケットを作りたい」というようなお話しもいただいており、今後の新たな取組みも期待できるのではと思っております。

［ウッドロード］
こちらは地元の「若狭和田小学校」の生徒を対象に、SDGsの授業の一環として取り組んでいただきました。海と山の繋がりを学ぶ授業ですが、これは地元の木材店の方からの発案でした。ブルーフラッグの効果として、このように関心を持っていただく方がいて、新たな取組が広がっている。そのような点も7年続けてきた成果ではないかと思っております。授業は5回実施し、ブルーフラッグとSDGｓを学習した後、山と海の繋がりを紙芝居で学びました。

さらに、木材店の見学をすることで海と山の繋がりを感じてもらい、ウッドロード作りのワークショップ、そして、設置をし、最後に小学生による活動発表がありました。「継続してこの取り組みをやっていきたい」と、小学校の年間授業のコマに入れていただけることにもなり、今後も継続していければと思っております。

今回の授業の目的は海と山の繋がりを感じてもらうことでしたが、ビーチへのアクセスは"誰にでも優しいビーチのため"という部分も小学生に考えていただく、いいきっかけになりました。また、地元の木材店との繋がりや親御さんたちとの繋がりもありましたので、地元の方への「ブルーフラッグの啓発」のいい事例になったのではと思います。

以上です。これからも頑張っていきますので、よろしくお願いいたします。

（出典：アノミアーナHP）

ブルーフラッグの意義・目的

きれいな海　経済活性化　持続可能なまち

海岸の課題（取得前）

海の環境汚染

・漂着ゴミ、不法投棄
・海洋プラスチック問題
・海、河川の水質、生態系への悪影響

水難事故・治安問題

・安全管理体制の不備
・救急、救助備品の不足
・ゾーニング問題
・水難事故、トラブルの発生

地域経済の衰退

・海水浴客、観光客の減少
・少子高齢化、過疎化、人口減少
・飲食店、宿泊施設の減少

障がい者・外国人への対応不足

・障がい者用バリアフリー施設の未整備
・機材の未整備
・外国人向け多言語対応案内の未整備

海離れ・地元離れ

・レジャーの多様化
・海の体験不足による若者の海離れ
・災害による海への恐れ
・都市部への憧れ

地域コミュニティの衰退

・地元愛の希薄化
・自治会加入率の低下
・沿岸地域の祭りなどの減少
・伝統文化の継承問題

ブルーフラッグの基準をクリアすると

▼　▼　▼

効果・メリット（取得後）

キレイな海

・海、川、街の環境改善
・ゴミの分別、リサイクル
・適切な排水処理
・生態系保護

安心・安全な海

・ライフセーバーによる安全管理体制強化
・救急・救助備品の整備
・警備強化
・利用ルールの策定

地域経済の活性化

・地域ブランドの確立
・マリンレジャーの活性化
・海水浴客、観光客の増加
・移住、定住促進

誰でも利用できる海

・バリアフリーのアクセスと施設の整備
・多言語案内
・ユニバーサルビーチの実現
・通年観光の推進

郷土愛の醸成

・子供たちのマリンスポーツ体験
・海の環境教育
・防災教育
・若者の地元定着促進

持続可能なまち

・行政、企業、NPO、市民の連携
・環境活動への市民参画
・地域コミュニティ活性化
・伝統文化の継承

第4回 海を守り、未来をつくる

無料
オンライン
開催

BLUE FLAG Japan サミット 2022

国内７都市のブルーフラッグ認証海岸・マリーナの関係者が一堂に会する全国シンポジウム

2022年12月3日（土） AM 8：30 ～ 11：30

定員100人 ／ 参加費 無料

1 開会・基調講演

片山清宏 ［日本ブルーフラッグ協会 代表理事］
太齋彰浩氏 ［サスティナビリティセンター 代表理事］

2 活動紹介

千葉光氏 ［気仙沼市観光協会 誘致推進統括官］
阿部大輔氏 ［南三陸町商工観光課 観光振興係長］
久保田靖朗氏 ［七ヶ浜町観光協会 副会長］

3 研究報告

海津ゆりえ氏 ［文教大学国際学部 教授］

4 優良事例表彰

5 説明会

ブルーフラッグとは、国際NGO FEEが実施するビーチ・マリーナ・観光ボートを対象とした世界で最も歴史ある国際認証制度。ビーチの認証基準は、①水質、②環境教育・情報、③環境マネジメント、④安全性・サービスの4分野、33項目。現在世界50ヶ国、5,066ヶ所が取得。日本国内は7ヶ所のみ。

［主催］ 一般社団法人日本ブルーフラッグ協会
［共催］ NPO法人湘南ビジョン研究所 ［後援］ 文教大学湘南総合研究所

海を守り、未来をつくる

第４回　BLUE FLAG Japan サミット 2022　オンライン開催

ブルーフラッグとは、国際NGO FEEが実施するビーチ・マリーナ・観光用ボートを対象とした世界で最も歴史ある国際環境認証制度です。ビーチの認証基準は、①水質、②環境教育・情報、③環境マネジメント、④安全性・サービスの4分野、33項目。現在、世界50ヶ国、5,066ヶ所が取得。日本国内では６ヶ所の海水浴場と、１ヶ所のマリーナが取得しています。しかし、各地域が抱える海水浴場やマリーナの課題は多様で、各地域では試行錯誤しながら毎年更新しています。そこで、この度、国内７地域のブルーフラッグ認証海岸・マリーナの関係者が一堂に会して認証取得の意義を再確認し、ブルーフラッグビーチの現状と課題を共有するとともに、国内におけるブルーフラッグ認証地域の普及による海辺からのSDGsの実現に貢献することを目的に「BLUE FLAG Japanサミット2022」を開催します。

プログラム

第１部　8:30～

● 開会 / 主催者挨拶　　オンライン参加可能

片山清宏［ 一般社団法人日本ブルーフラッグ協会 代表理事 ］

藤沢生まれ。厚木市役所、イギリス・スウェーデン海外研修派遣、神奈川県庁を経て松下政経塾に入塾。2011年NPO法人湘南ビジョン研究を設立、理事長に就任。海の環境問題に取り組む。2020年「かながわ地球環境賞」受賞。慶應義塾大学SFC研究所上席所員。

● 基調講演　**「森里海の持続可能なまちづくりをデザインする ～いのちめぐるまちを目指して～」**

太齋彰浩氏［ 一般社団法人サスティナビリティセンター 代表理事 ］

南三陸町在住。民間研究機関で海洋生物・生態学研究に従事後、南三陸町へ移住。東日本大震災後、行政職員として水産業復興の計画づくりに奔走。地域資源プラットフォーム構想を実現するため役場を退職し、2018年一般社団法人サスティナビリティセンターを設立。

第２部　9:20～

● 活動紹介　**「ブルーフラッグ取得に向けた新たな取り組み」**

事例① 小田の浜海水浴場

気仙沼市観光協会
誘致推進統括官 千葉光氏

事例② サンオーレそでがはま海水浴場

南三陸町商工観光課観光振興係
係長　阿部大輔氏

事例③ 菖蒲田海水浴場

七ヶ浜町観光協会
副会長　久保田靖朗氏

第３部　10:00～

● 研究報告　**「海辺における市民参加型環境活動を基盤としたイノベーションに関する研究」**

海津ゆりえ氏　［ 文教大学国際学部教授 ］

鎌倉在住。農学博士。有限会社資源デザイン研究所代表取締役社長、文教大学国際学部准教授等を経て現職。NPO法人日本エコツーリズム協会理事、環境省エコツーリズム推進会議委員、鎌倉市観光協会理事等を歴任。専門：エコツーリズム論。

第４部　10:20～

● 優良事例表彰　**「第1回　日本ブルーフラッグ協会賞」 授与式**

一般社団法人
日本ブルーフラッグ協会
Japan Blue Flag Associatio

日本ブルーフラッグ協会賞とは、日本ブルーフラッグ協会が年に１回主催する賞。ブルーフラッグの取得推進に尽力し、日本の海岸環境の保全及び発展に貢献し、優れた功績を遂げられた方々並びに今後の活躍が期待される方々（団体を含む）に贈られます。

第５部　10:40～

● 説明会　**「ブルーフラッグ取得を検討される皆様へ」**

対象者：ブルーフラッグに関心があり、取得に向けて検討したい自治体、団体、企業、関係者の皆様

● 閉会（11:30終了）

お申し込み お問い合わせ

申込方法：以下メールに参加者の「所属」「氏名」「メールアドレス」をお送りください。ZoomのURLをお送りします。

一般社団法人 日本ブルーフラッグ協会　サミット事務局
HP https://blueflag-japan.org　mail info@blueflag-japan.org　tel 090-9017-2459

湘南VISION大学

海をもっと楽しもう!

「湘南VISION大学」とは、NPO法人湘南ビジョン研究所が主催する「海」の環境教育に特化した市民大学です。
「海をもっと楽しもう!」をテーマに、海を体感するアクティビティやワークショップを通して、海の生き物や環境、歴史、海の楽しみ方を学びます。学校教育法が定める国立や私立大学ではなく、子どもからシニアまで、誰もが入学できる「海の学び場」です。
当大学は、国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）の理念に共感し、「14.海の豊かさを守ろう」の達成に貢献することを目指しています。2018年5月5日に設立・開校し、5年間で217講座開催、合計 7,242人の生徒に受講いただきました。

ミッション

「湘南の海を守り、未来をつくる人」をつくる

NPO法人湘南ビジョン研究所は、国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）の「14. 海の豊かさを守ろう」を達成するために、具体的なアクションとして、①海づくり（ブルーフラッグの取得推進）と、②人づくり（湘南VISION大学の運営）を実践しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
世界を変えるための17の目標

SHONAN VISION

特徴

① 海を知り、体験できる学び場

教室は湘南の海。海を体感・体験してもらう魅力的なアクティビティ、ワークショップを用意。海を知って、思いっきり楽しめる大学です!

② 海を専門とする多彩な講師陣

講師は海を専門とするアスリート、社会起業家、経営者ほか、一流の研究者。自分が先生になることもできる、みんなでつくる大学です!

③ 海ゼミの仲間と交流、実践

授業には海を楽しむ仲間がたくさん参加。授業後に海ゼミをつくって交流を続けるのもOK。一人ひとりの「イキイキ」を応援する大学です

海辺の国際認証ブルーフラッグ認証取得を目指そう!!

2022年4月に一般社団法人日本ブルーフラッグ協会が設立されました。日本ブルーフラッグ協会は、日本で唯一のブルーフラッグ取得支援を専門とする団体で、日本のブルーフラッグ運営組織である一般社団法人JARTAと連携し、ブルーフラッグの取得支援及び普及促進を通じて、海辺からのSDGsの実現に貢献するとともに、日本の海の豊かさを守り、持続可能な社会の発展に寄与しています。

日本ブルー フラッグ協会では、全国のブルーフラッグ認証取得のご相談にも対応しています。

- ●現状調査　●課題分析　●環境教育
- ●水質調査　●安全リスク調査
- ●バリアフリー調査
- ●取得に向けたプランニング
- ●ブルーフラッグ事例勉強会　ほか

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.58
2023.02

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR：壱岐信二、久保卓 、安齊ゆう子
白田祐子、徳田龍太郎
西尾英子、片山久美
ART DIRECTOR：大戸千尋
COVER PHOTO：西尾英子

湘南ビジョン研究所
https://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org
090-9017-2459

SHONAN VISION vol.58 | 2023年02月号　2023年02月25日発行　発行：NPO法人湘南ビジョン研究所　〒251－0027神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3-9-29　shonan-vision.org